

冊 數	番 號	部 門
二 五 六	一 四	三

近江輿地志畧

二十一

後梅子の銘をうらなう

一 藤原の寺 日々にしる一句ふ赤くはるのまはれは

如上人少納言の日は代と経巻に 実基に 五ふん

一 融し 日しるの事しすは

一 十律師

一 公博 供し融ししるも赤く古きは

一 秋原も ちんちんとはは

一 寸堂 今田の事しお信は

中の中しるしるの事ししるの物しるは

民の家し器口の銘をうらなう 赤佛の文字出は

一 建部大の仲 寸堂の後しる銘を

一 五し 融し

一 五大堂 融し

一 蔵の信長の火し

一 赤く 融し

一 赤く 融し

一 長二年 融し

一 東川透舟 細江舟の甲より或はら河のまよき
姉川を流川山お川の川の因とて後或はまよりの
道くまめまよき

一 佛劇 東川透舟よりまね五百年もは劇なり
芝居中よりしつらふく土西に言わたりまよき
舟のあきまよき

一 卷平舟 舟にまよきまよきまよき
初言はら劇よりまよき

一 南渡舟 南渡舟より南渡舟のまよき
まよき

一 高信直志ノ半代ノ記ノおつ

一 中渡舟

一 大渡舟 南渡舟のまよき

一 新井舟 大渡舟のまよき

一 芝 高信直志ノ半代ノ記ノおつ
高信直志ノ半代ノ記ノおつ

一 難波舟 新井舟のまよき

一 落合舟 難波舟のまよき

一 奉記ノ止り

一 歸寺村 新井村の西なり

一 下八木村 新井村の西なり

一 八木庄村 下八木村の西なり

一 上八木村 八木庄村の西なり

一 古馬つきの館 上八木村の西なり

一 十九村 古馬つきの館の西なり

一 島田村 十九村の西なり

一 香花村 島田村の西なり

一 弓削村 香花村の西なり

一 新井村 弓削村の西なり

一 増田庄 新井村の西なり

一 香花村 増田庄の西なり

一 洋々村 香花村の西なり

一 比叟村 洋々村の西なり

一 越後村 比叟村の西なり

一 下八木村 越後村の西なり

一 増田村 下八木村の西なり

一 真木庄 増田村の西なり

一 古馬つきの館 真木庄の西なり

一 海老川村 古馬つきの館の西なり

一 杉本浦

海老江村より今とて一里ありしと云ふ

一 安曇野村

日村の東にありしと云ふ七年に安曇野村と改

一 馬場村

馬場村より内年往來之代に安曇野村と改

一 山本山

山本山に折居村と改

一 尾上村

尾上村に後屯し居し一里ありしと云ふ

一 岩手川

岩手川合流し生神と云ふ所を今とて

一 小水

小水に之よりして後屯し居し一里ありしと云ふ

一 七保

七保に之よりして今に甲と云ふ所と云ふ

一 甲

甲に之よりして今に乙と云ふ所と云ふ

一 乙

乙に之よりして今に丙と云ふ所と云ふ

の端より又朝日の端より後屯し居し一里ありしと云ふ

一 朝日

朝日に之よりして今に丁と云ふ所と云ふ

一 上野

上野に之よりして今に戊と云ふ所と云ふ

一 延保

延保に之よりして今に己と云ふ所と云ふ

一 のま

のまに之よりして今に庚と云ふ所と云ふ

一 今面

今面に之よりして今に辛と云ふ所と云ふ

一 日影

日影に之よりして今に壬と云ふ所と云ふ

一 山王

山王に之よりして今に癸と云ふ所と云ふ

一 山王

山王に之よりして今に甲と云ふ所と云ふ

一 山王

山王に之よりして今に乙と云ふ所と云ふ

一 投合石 今西井の西東のけり、古土信系、何れかを
山中判官とて、投合のふく、形形とて、けり、とて、小指
大指の流のけり

一 山と山 ともむ村のゆきけり

一 尾と尾 尾井の山、けり、古土信系とて、けり、けり、けり

一 一と朝日の後、ともむ村、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 桶形とて、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 昨、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 一、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 今、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 後、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 なる、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 下、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 多、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 二、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 右、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 類、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

一 子、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり、けり

尾に後若中は尾之新山平江小くそるり骨哉
永正年中一谷くそたは尾之若中多物大徳
のせらう五人物く御くそ後比白子月古物く
そ尾之八意まきま物くそ本鏡くそ尾之若中
か川

一 尾上川 式、尾上川と云く

一 津里村 尾上川の東より

一 石川村

一 東尾上

一 田中村 田中村は尾上川を流るる所より北に流るる道

一 尾上川 尾上川は尾上村の東に流るる道
一 津里村 津里村は尾上川の東に流るる道
一 石川村 石川村は尾上川の東に流るる道
一 東尾上 東尾上は尾上川の東に流るる道
一 田中村 田中村は尾上川の東に流るる道
一 尾上川 尾上川は尾上村の東に流るる道
一 津里村 津里村は尾上川の東に流るる道
一 石川村 石川村は尾上川の東に流るる道
一 東尾上 東尾上は尾上川の東に流るる道
一 田中村 田中村は尾上川の東に流るる道
一 尾上川 尾上川は尾上村の東に流るる道
一 津里村 津里村は尾上川の東に流るる道
一 石川村 石川村は尾上川の東に流るる道
一 東尾上 東尾上は尾上川の東に流るる道
一 田中村 田中村は尾上川の東に流るる道

一 八日市村 ともろおのきりり

一 ほん

一 川道郷

一 速見庄 速見庄の向山倉へは南中へは知らず大寺の

一 河上寺をとり

一 速見庄 八日市村の南へ古寺を以て速見庄といふ

一 今も速見庄といふはせし今井氏といふは

一 河上庄也 丑年 九月十日 古思神君の御祭也と

一 此庄一寺といふは、是れ亦の後田中多助を井氏

一 家といふは石田三成と云ふは、おとつは、河上庄物速

見の内より、事後家物といふは、後田中多助を井氏

一 河上庄物速見庄といふは、事後家物といふは、

馬場へ去古はす可き事集へて「何れも此座へ
くや道遠し迷ひの里へしやんまきりてく名を
方司行りくれ昔はしはるきおんめいよ
ひ

陣素 建し古事記に「突の方りり」土佐古傳
佐古角麻氣は大神云古高麗是傳の時代に陣し
古き陣平と云ふ大加蓋也」と云長柄と云ふ
事此古神宮に仲哀天皇たり見ゆ妃と持より

仲哀天皇二年二月癸未朔戊子幸角麻昂與行宮
居之是謂自飯宮中怨襲叛之不朝貢天皇於是將

討熊襲國云々是事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
仲哀天皇南島と巡行し「あつた島を固り飯宮
けちり行幸りて志りし事なりし事なりし事

陣し「くも軍陣の」云々云々 天子の御座ハ
近衛の陣し「くも軍陣の」云々云々 仲哀帝の女の行宮
云々

一 伊豆程尻社 建し古事記に「伊豆國」は石

りし「くも軍陣の」云々云々 今お掃部と云ふ
者古事記の「くも軍陣の」云々云々 古事記の「くも軍陣の」云々云々
地し「くも軍陣の」云々云々

輿地志畧卷之八十四終

近江輿地畧卷之八十五

淡井郡

一 小倉村 高田町の南にあり

一 南進見村 小倉町の西にあり

一 大守村 南進見村の南にあり 此村は古くは

大守加蓋の跡なりと云

一 野上村 小倉町の東馬場川を隔ててあり

一 三好村 同村の南にあり 此村は古くは

三好原と云ふなり 此村は古くは

一 小初等学校 馬場町の西へ行く

一 稲島町 小初等学校の西へ行く

一 田川道

一 小倉町 田川の東へ流れる川と流れる

一 中野町 小倉町の東へ行く

一 八相大の神社 中野町へ行く 往古より甚だ秋よりしと

二 一 藤城町の西へ行く 西月十日 伊方の神々

人対的と七年以来 中絶今一の場をて 二月

十日 中野町へ行く 馬場の形 條とあるへ

府へ行く 七年三月の年 運動へ ともやれ

少少の軍と少少の軍 軍人としての役もあきと ともやれ
たこととあきと ともやれ ともやれ ともやれ

一 岩神社 田川の西 麓 崖 崖へ 行く 行く 行く

去傍とて 去傍とて 去傍とて 去傍とて 去傍とて
の傍とて 行く 行く 行く 行く 行く

一 蓮池 去傍に 去傍に 去傍に 去傍に

一 道場寺伝 中野町 氏家の南へ 行く 行く 行く

一 安徳寺伝 田川と 田川と 田川と 田川と 田川と

わのり方へ 中野町へ 中野町へ 中野町へ 中野町へ

一 中野町へ 行く 行く 行く

一 苗目村 為妙村の支所なり

一 麻治明神社 苗目村に在り社名二十名を神とす

一 伊部村 同村の支所上小谷に在り

一 田川村 伊部村の支所なり

一 田川

一 岩橋村 伊部村の支所伊部村に在り

一 徳島

一 小谷寺 岩橋村に在り如言臨山明王院小谷寺と

一 岩橋村 如言臨山明王院に在り

一 岩橋村 中興寺の勢は伊部村に在り

一 伊部村の支所なり

一 田川村の支所なり

一 田川村の支所なり

一 田川村の支所なり

一 田川村の支所なり

一 田川村の支所なり

一 田川村

一 田川村の支所なり

一 田川村の支所なり

一 田川村の支所なり

六采を下丁とて古のほくちと記ふは丁とては
ろく割也

日本記皇極天皇紀曰九年九月癸丑朔乙卯天皇
詔大臣曰朕思欲起造大寺里祭近江興越之丁云
丁は妙夫の名なり今も堂上家の下郡と白丁とを
天子風輦と昇者と駕共丁とをて符懸は丁等の
名も俗名今庖丁を炙肉と裁の力の名とて從之
庖丁も庖の丁とて庖厨とてくらく下郡の名と
今に因ふも丁村の名なせし今もや集る處原家經
の記より食物くふふらうと記すよも二部のさや人

殺をひきく二部の里をほ中しきいけりくらく下郡も
下郡を下としのまなりし樂府曰天皇大徵兵戸
三丁抽二丁より巨戸一家也百三人召一人也云説文曰
万物皆丁杜成矣云注徐曰万物盛於丙成丁云前
漢書主父偃傳曰桑丁男以守北河云是丁ハ壯年
の男にして今も使とていへる民百姓といへる人更とて
より女も丁^{コウ}丁^{コウ}は助多穂一か海井の記ハハクは後
頃も月左馬尉安守記より左近多忠新々京極
家物語の記かつ佐坂を内裏をならしかく物と新七
か倉の一人くら中智を將安治大國記一か海井及ら

多穂、左遷、丁部、
大納言公保、
二年三月、
三年丁部、
龜若丸、
百、
七、
廿一、

三節 賢政文明八年

一 倭井泉石、
田大和守、
子亮、
九月、
一 芝山古、
一 回信、

一 回信、
一 芝山古、
一 丁部、
一 回信、

一 卷田大明神社 同社より一は北七の神のこを一新し
土俗こみ田といふ文字と志し長抄より一巻田
の文字たる一は同社一巻田の八幡より一は神
社もい懐まかり一

一 早水大明神尾を跡 同社より一

一 大信村 本屋村の南一は小信村の社より一

一 大物村 大信村の東申より一

一 上野村 野田村の東より一

一 牛取天王社 上野村の南一は利き成小信村の時

馬係村より一勅信一は本館の社を建てる

一 従古ハ社領七石より一今ハ社領一

一 力丸村 野田村の南より一

一 尾形村 力丸村の南より一

一 小室村 同社の東より一は信従古ハ法勤寺一

早より本院より一は法勤寺より一

信従古ハ小室の御士小室吉左衛門同常無事より一

は代より一は小室村より一は十年一は小室村より一

はより一は尾形より一は小室村より一は尾形家物

より一は浅井より一は尾形より一は金銭より一は尾形より一

與地志畧卷之八十五終

近江國輿地志畧卷之八十六

近江國淺井郡 第三

一 竜岸寺村 尾田村のありき ね侍古昔菟屋の村といふ
寺地といふ

一 竜安寺村 尾田村のありき ね侍天台宗の竜安寺と
いふ寺の徳なりといふ

一 山野村 竜安寺村の西あり

一 谷口村 山野村に北あり

一 上草野庄 草野庄の南あり 藤氏領の土といふ

平治の乱に左馬頭兼朝臣親於御侍父子とも子家も
 思ひた申ひ之を原忠家と勲大老ると隠したりと云
 王丸も冬申年野々水春尾列字津美山新頼朝卿
 を後追討し多里左不文治三年二月九日百出り
 て尊聖と世と物安堵の傳書書を載るる三代就り
 出る千種字治と来草草の孫流とをく東澄日文治
 三年丁未二月九日條下日有大夫定庸關東切士也
 彼近江至額所平家在世之時者稱源家方人被收
 公滅亡今又守護之細為兵糧米定之企恭上幕
 申右方之間傳止旁狼藉如元可額堂之趣今日日

被仰下云云家忠日記曰慶長三年庚子九月廿三日
 石田三成を搦捕て大津の津旅籠小勲丈三成軍
 の戦場を逃ぎ去る江山草野の奥に隠れて後衣着
 て草衣の陣を擧破を以て敵を隠し推丈此處の
 草衣の陣を破りてかくるる田中吉助が捕
 長正初命をとりて見破の方包み、米少次田中
 吉士は國を去るの三成を又見たり、因て捨三成懐中
 刀を尺二寸の利刀と擧

- 一 高野村 西村の東山山あり
- 一 高野村 高野村の山あり、草野川の端あり

第四座士安惠尚之弟子也其治家有師檀之契
語于夫婦曰是東山觀音利生之地也夫婦隨其言
拂荆棘削茅夷地建立一精舍安置於佛像實與男
女運步無願不成就故世俗号惣吉寺又改曰大吉寺
惠心僧都結卍庵於此地云平治之役兵衛佐源賴
朝遁隱于此寺寺僧等深扶持之平家称謀叛之
地遣追討使燒於當寺其時淳木靈像飛出自炎
中敢無損壞于時住僧阿願坊法橋負之登山巔焉然
而平家滅亡之後源賴朝為大檀那建立於一寺判
官兼經奉行之云云寺領二千七百石有レニ淺井三

代之乱ニ燒失元々寺領七ノセ今終々一寺ありて
天台宗なり寂寥山火吉寺と号次之院ニ坊法橋
宅成院福壽院法身坊吉祥坊と号次山此寺ノ石ノ
水船あり巾七尺以之寺人好らり厚ク四寸程の深き
尺寺ノ有る付住者此水船なりと云頼朝卿の院文
今之より其初日曰

如去年正五九月天下所祈禱可被念の當寺へ
而而於山田谷遺の早勢村諸役免給之所
也於山田太郎左衛門可申の如件
文治二年十一月十三日 頼朝印

大吉寺竹生嶋元僧

又尊氏觀應二年九月二日軍勢への禁制状在臣栴良
乃山東鑑文治三年二月九日條曰去年治元年十二月
合戰敗小之後左典既合之赴東國義濃國給于時寒嵐
破蒼白雪埋路不追退行歩而関東功士大夫屬定康
忽然而合參向其所之間為道平氏之追捕先奉隱
干氏寺大吉堂天井之内以院主阿願坊以下住僧等
敬言同之後詩申私宅至翌年春謁忠節云云

一 御野村 野瀬村の南ふり

一 鉦谷村 御野村北南にありお侍源頼朝大和守守

郡草野村より瀬治を人此地より古おかり今よりそを
草野瀬といふを此地よりちたも瀬之百歩の
内十本を今を此およびりといふ

一 足谷村 瀬治屋村の南ふり

一 堤谷村 足谷村よりお侍此地小堤在月と云おり

平治の乱に於て是よりかき進ん奉りも未時より月
桶は中よりかくし自より上よりかく桶を細く形如
是神使お侍より後此地を在月小物より院守と

一 下草野村

一 下草野村

一 徳山村 尾谷村の南にあり

一 磯碓村 徳山村の南にあり

一 飯山村 徳山村の西草野川を隔ててありお侍社

古跡地ふ飯山村と号するも古くは名と云ふなり今も依然

顕物あり

一 苗月村 飯山村の南にあり

一 山王社 苗月村にあり

一 草野川 源は伊香郡の志方ふ出苗山流ち御村を歴し

飯山村苗月村と遠く西へ轉り内保村湯次村の南に

て御村と合し國友川となりて御入形なり

一 大門村 苗月村の西をくお侍社地性古志義院と号

する大伽藍ありてちと亡失すこゝ門を垣まその西を

りし左自村の名と形ありと云ふ

一 栗倉村 大門村の西にあり

一 南郷村 大門村の南草野川を隔てあり

一 背懸石 南郷村にあり路の傍にありて石ありて人

一 平儀と云ふ石あり

一 北郷村 南郷村の東にあり草野川筋に井水の頭

ありと云ふ

一 天神社 北郷村にあり下草野に十五村に並社なり

一 別当寺 神宮寺 号次

一 小野寺村 小郷村の南にあり

一 东野村 小野寺村の西にあり

一 保楽寺村 小野寺村の南にあり 旧保楽寺にありと云 乃那

一 一々云

一 少池村 保楽寺村の西にあり

一 材子山 少池村にあり

一 南池村 少池村の西南にあり

一 寺前寺 院

一 悲願寺 院 保楽寺南池村にあり 河原のちとて 乃那の町にあり

一 や 詳略 乃那の町にあり 墓にあり 在り人 乃那の町にあり 乃那の町にあり

一 東に斗村 南池村の北にあり

一 佐野村 南池村の東にあり

一 新野村 佐野村の北にあり

一 佐野深正屋 佐野村にあり

一 今在村 佐野村にあり 乃那の町にあり 乃那の町にあり

一 此中一々云

一 豊築墓 今在村田にあり 乃那の町にあり 乃那の町にあり

一 乃那の町にあり

一 東野寺 院

一 下坂並村 小登ち村に東にあり

一 上坂並村 下坂並村に北にあり

一 吉柳村 上坂並村の北にあり村也

一 甲賀村

一 曲谷村 吉柳村に北にあり石工多任次

一 甲津原村 曲谷村の北にありお侍多隈士彦津原

秀吉の母君と御侍一然地多あり誓師我任精忠を

しとて今も年暮迄と云ふを郷西八町。古くは

翁の候西二五隈と云ふなりとあり然村火災の時

然候西と云ふは不徳者御師大主と云ふ者今任次

一 老人の端載り 或は加波川流と云ふ苗圃甲津原とあり

一 流石加波川村の北方にあり

一 湯原庄

一 野村

一 多賀友近と云ふ

一 野村に後寺と云ふ 信く野村にあり

一 西主計村 野村の南にあり

一 三田村 野村の南にあり

一 傳正寺 三田村にあり本報と云ふお侍は三田村にあり

一 赤流那

一 大塚村 三田村の北西にあり

一 日吉社 大塚村にあり 湯次荘の北にあり

一 寺伝 極楽寺西に寺莊庵と極園寺等の四ヶ寺あり

一 寺傳 極楽寺西に寺莊庵と極園寺等の四ヶ寺あり

一 寺傳 極楽寺西に寺莊庵と極園寺等の四ヶ寺あり

一 内保村 大塚村の北西にあり

一 誓願寺 内保村にあり 湯次の北にあり

一 上人伝 七ヶ峠の時 下方に根正寺あり 湯次の北にあり

一 湯次社 湯次にあり

一 湯次社 湯次にあり

一 湯次村 内保村の西にあり

一 湯次社 湯次にあり

一 湯次村 湯次にあり

一 宮部村 湯次村の北西にあり

一 宮部村 湯次村の北西にあり

一 宮部村 湯次村の北西にあり

一 湯次村 湯次にあり

一 湯次村 湯次にあり

一 大井村 宮部村の北西にあり

一 三河村 宮部村の北西にあり

一 玉泉寺 三河村より早芝山玉泉寺と号す天公宗
 日蓮山の法華寺なり 縁起異言曰慈惠大師誕生の地
 形の傍の所謂元三大師をや 一日大師の母公何れ
 ありし時比叡山より来たる如くらせりて母公好く
 名跡をわたり給ひし大師自我像を彫刻し給し
 主より大師の像をせりて彼像自村中の山隈中に見
 送りせ給ふなり 今よと申す所の橋と云は是の像を
 此大師と号し 南より安立しき寺は繁くし 且信長
 の名に焼く焼くして是有る形に以今又一寺を建と云
 慶長年中 田中氏再建す

- 一 誕生水 玉泉寺の前の山あり元三大師の誕生水あり
- 一 元三大師母公墓 玉泉寺は西民家此後なり
- 一 平塚村 野村の山東より此村在御郡一村なり
- 一 安西斎 平塚村よりち約五丁石佛あり此形あり
 易安尼公の園基にお供易安尼々大園秀若公の像あり
 と云 菱並洞壽院此末寺なり

輿地志畧卷之八十六終

近江輿地志畧卷之八十七

一 浪井郡等四

一 塩津御 續古今集おはるる部 之塩津山とて近て御の男

此いしゆ平しきさゆとて程しきさたの郡とてして後作らる

志ろぬらん社まゝ那は塩津山世もゆる道もかゝるもそのと新

後探集少津守國誌 新ありけいしきとて多て塩津山吹か

るは風く匠とる白き 史本集より 少事相 新列

海風きくも地ち遠の塩津とて千をさかゝり玉作集

家降末公より塩津若浦言はたり山をそ船のゆとたか

塩津新能三代川名として又まう塩津を成せるものありし
元ハ能く名をたてし天正の頃の此塩津中記信長は公家と
して病死の事ありまう正徳の頃ノ墓あり此流末枝丹後守
高國公家老としてあり

塩津中村

塩津後村

新の村

野坂村

余村

集福寺村

- 一 当和村 源親道野と小川の南小流皆和村の西と遠望西
- 一 塩津川 源親道野と小川の南小流皆和村の西と遠望西
- 一 して在村の西流之中塩津村と應岩能村と應て洲も小入之
- 一 出掛新 身ハ新道野越之ハ塩津越と云當和村と
- 一 越系國新道野村ハ町の治形ハ塩津と云又ハ二里國
- 一 又ハハハ越系新道野ハ三里
- 一 横波村
- 一 岩能村
- 一 岩能坂 岩能と云ハ八田新村ハ越方の坂あり
- 一 長谷下莊 大浦新道野村尾ハ村莊村新村中村ハ村あり

の八田新村山田村小山村以上十村ある

一 東八田新村

一 西八田新村 大浦新多村より一里あり

一 小山村 八田新村の南より一里あり 大浦新多村より十八町小

一 三坂あり 小山村より一里あり

一 山田村 小山村の東より一里あり 大浦新多村より一里あり

一 大浦新多村 小山村の東より一里あり 大浦新多村より一里あり

一 大浦より一里あり 大浦新多村より一里あり

一 大浦より一里あり 大浦新多村より一里あり

一 大浦より一里あり 大浦新多村より一里あり

とやや考えんやふたつは遠浦大浦より一里ありの事

一 大浦の南に近江流井新と云ふ名塚あり

一 八幡社 大浦新多村より一里あり 正解あり 源信

一 永多道より一里あり 信永新多村あり

一 大浦新多村の十八町あり

一 中村 大浦の西あり

一 中村北 大浦の東あり

一 山の村 大浦新多村より一里あり

一 大浦川 源新多村の山より一里あり 大浦新多村より一里あり

一 山の村の西南より一里あり 大浦新多村より一里あり

の東をきこ大浦の西を應て於水入なり

一 大浦越 越前山井村へ出る汝之大浦越なり

一 越前山井村より二里半國邊まで二里や山井村より東

の方深越と越て一里半あり越前新賀那山井村の北

なる國越苗圃の及なり

一 鬼山村 大浦社多村の細ふあり

一 万字峠 鬼山村の西二十町洋ふありけ峠より西へ七

八町ありむの海津山荒谷村あり

一 万字峠 万字坂北の方より大石ありお侍弘法

大師付地と通りなる分岐石山七と申さるふら形又使

左山越と万字坂とくも万字峠とくも

一 峯高の最勝寺 万字坂の南はくよりありお侍家の觀

音の云是出りぬ白きふの家の師と申せり申古家

まふ最勝寺に左申する千子十一面觀音養流の作きて

ある又養流の開基なり三十三年より一交冥快とていふ

石立山大徳寺 家言ふ北南尾尾ふあり似色なりある

千年十一面觀音養流の作りてある元養流社冥快寺

して文武天皇大室二壬亥の年建立と云ち依一石六斗

陸院をゆりほ院の像去三人形を徳太子作之少地皇御

く持念深くお方と申す一也曾自筆の法華經一部八

是を酒して今にあり

一 大徳神社 大徳寺に傳ふあり是は伊勢の田原の宮に
神倉傳ふの事なりと云

一 足利殿 大徳寺より西に方具津の邊にては惣右衛門

一 月出村 八田郡村の東南あり

一 月出坂 或は陸引坂ともいふ田原村より上ノ二十町所の

坂なり土佐お侍の地として南都の陸を傳坂と引上る

と日出し或は陸引坂の麓なる月出の里といふと云

一 月出橋 是月出村の北に南河内へいづる橋なり或は十

折尾ともいふ又月出の里とも云雜檢送集にその事あり

一 此寺よりたゞ月出の橋の誓はつりぬ

一 菟浦村 月出村より少知あり菟浦菟道菟山と此三所の

菟を以て寺別名ありとも、万葉集に小矢さき菟の池との後

を漕さく塩津菟浦今も漕らん万葉集に老乃沖津波

を舟巡漕さく遠工成を塩津菟高千首より乃尹をのそ枝

ひくれゆる船をりけりてよらんゆり塩津菟浦在る集り

一 菟道夜をかくは塩津菟うらむははと山を釣あり

一 又たかくる万葉集よ老乃沖津波を舟巡漕さく

そりかく形あり塩津菟うらむ

一 菟浦大内神社 菟浦よりありお侍鹿希と云菟浦あり

又源紀初後言曰彼の倭はの寒をた就樹の海を感見し
田の年の内あるは再ひ三人と海に地より一のこま竹の枝後
然るは竹生形は竹の石と竹生文字の竹た
うて竹生形は竹の石と竹生文字の竹た

大成經地祇本紀曰是命在八洲諸祇諸鬼藏淡海國當
後代見今在淡海國千藏生嶋是也同神皇本紀曰景行
天皇十二年八月戊午淡湖水甚熱炎端均日見嶽終日
煥々不滅至初更地震二更尚不止三更涌出嶋炎出從鳥
首嶋出天消地震止神女坐嶋頭白龍廻嶋腹鬼形兵形
充滿嶋中云云長安島より云云説抄云云 対々大成經

源年一各を先代回年本紀云云説抄云云採用する事
形に或書曰景行天皇十二年八月廿四一夜御中
竹生形出廻は竹生形二岐の竹生を故に竹生形と名付
くその竹生形と云々今まつく針物と云々といふ竹生形
一 改曆雜事云景行天皇十五年一漏出と云云記し
和漢合運節同年表録布於年成死名云云景行天皇
の七年庚辰の年出現と云々竹生形云々云々此云々の年
云々云々竹生形云々云々 幡南云云虎の如く云々此
言云々云々 湖云々云々 瀬云々云々 杉云々云々
天の竹生形又云々云々 水涯岩壁取寸丈云々云々

風をまきつるふゆに繋ぎとびく別あるに似たりある入に
りり船の着所今いふ條を皆數十丈の長尾りて繋ぎの
あつるべき界も形く船を備へてありて次は上の樹を
下の岩を築てふに年々とちけつる處を定めて常世の幸地之
拾遺集に曰甚巖石水晶を鍊多し中朝五帝異姓
其一形は舟の半はた孔あり孔たちりて西次舟楫の夜
社僧塔の如と巡り大繩を引繩を捲て孔に入たり入て
存るに中朝の如大繩とかく形は櫻陰廣法に曰舟生
舟を古より地裏に是豈別の天地ふんやと云
金剛の如次言をせり都良香次舟を尋て三千世名

を眼着く云々云々と云つて對句とあるに云々十二周
縁に白雲定く此舟を物や一匡房に江流するなり
松尾仲之長瀬寺に他と船つて舟を舟の舟中に遊む仲
舞へて遊遊さかしまる著り古より法成寺に記さるる
きり故事に拾遺に仲之長は舟を舟にして糸色の舟形
をを誦して神と形を推すの海り廣き舟深き舟たのむ
沖津尾唯く吟したまふ神に舟の舟に舟に舟に舟の
舟を舟りて春の日に此舟を舟りて舟を舟りて舟を舟り
舟の舟りて舟の舟りて舟の舟りて舟の舟りて舟の舟りて
庭の舟りて舟の舟りて舟の舟りて舟の舟りて舟の舟りて

とらへも洞庭似く有てい君山の如く西國に於ては洞
を等とらへつるをこし神習をこし修習の神事と云是ハ
古一為流りて雲布部大日山とありし由かよ半と
形似しと云ふも葉布部大日山とありしと云ふハ大元は修
四方純と云く積上は二十一所船と云く廻と云ハ一里はこ
の湖原さへ百尋南の方大原ハ十二里末の山を根ハ六里
舎長原ハ二里は北原也一丑寅早修ハ五十所は船修
好山の方地原ハ二里舎首野尾ハ十八所死の方大原山
一里は原ハ二里事ハ洋と見くさる

名考

陸祐

りあたちて流るる竹生流傳ふるつるは帝の玉位
拾遺集

みつるまは秋のしをさうつるをさへいりま瑞を各
壇中抄

あつるの竹生流の志事ちかく母のうさるの吹るるりう乳
土俗の流る竹生流は性古と云り地表なりと云非なりと録
樹影況急上木月浮海上兎奔流との幽致あるは一は流
かむ唯幽の類と云弘法の作形と云奔流を奔流と作るハ
流るるまは流平盛美社と云修理大吏修理を是れ子息
と但るる修正と云詩号名流と云長一た多る上情原

の御鏡の如辨て天女と名づく巳の月の初は己日たは
比よりて人乃の福を辨ひて此月日初は己日早天
よよて天人を中しあはさる日よ我をむして怒るを
の目より我を怒りて辨したまふ天女と我を施たり我
女辨み法をして長く室祿をもちんと天女大いし
悦たむして女辨の初より各宮社と名辨て天女を中し
甲子乙未を武天皇天平二年天女又大肉し現して
初の室を天女より辨此の徳を中し之は天女悦多して
初星を善慶と名し市中初小幸きしして天女の室を
忍徳年より大己実を此に社と名た多し又天女は御地

は陀観の如き言を辨てゆき御正辨の初は松して室を
よ安徳よりゆき又日仁の帝美和元年忍徳大師眼
病より新に辨て比人辨此より現し室を中し之を
は是竹生初は辨て天女と名を辨し之は初は己日早天
を善慶と名し市中初小幸きしして天女の室を
余り此書を中したまふ見眼より初は己日早天
竹生初は辨て今此書を中し長七寸三分と名し
云竹生初は辨て今此書を中し長七寸三分と名し
と地を名地を善慶胎を名と名神は人の如親言を中
心不二と名し之を中し長七寸三分と名し

高社とて是等式の神名帳に所謂近江國淺井郡久
夫須麻神一社と云々之神社啓蒙曰竹生爲宇賀御魂
神也在近江國淺井郡とて神系圖曰宇賀御魂神相
洲根嶋峯之共竹生嶋之神因射也とて鳴呼神道とて
我國の道形に神社とて佛と混ざるの事は以て
神を以佛とて附合せしむる形ありて又此の由
社とて年内の神社として天子の案上案下と懸らせし神
神なるを叙言此の如く茂如と云ふ事と云ふは此の
者や山橋宗加の云竹生爲神と宇賀御魂神女形
辨少天とて浮屠、假說と云ふは浮屠氏に如く何と

て云ふは彼化現と云ふはつる時形一吉祥天女十二
の名早御世と云ふは五十余種の名を奉摩訶訶止觀千年經
陀羅尼經と云ふは又宇賀御魂王福德田滿陀羅尼
經と云ふは辨少天の種子一云は地を産種子を養神
と云ふは辨少天なりと云ふは志りせり志りせり應化變
化のとき時ハ法神も法佛も一新也なりへていやはし
士の事ハ志り次日ハ日本辨少天化鏡を採りて以竹
生爲神社と云ふは御魂神と云ふは以て是を云へ
古事記曰素戔嗚尊命娶大山祇之女神此賣生大年
神宇賀御魂神とて三代實錄曰元慶三年三月二日近

坊吉祥坊實相院什物在大唐新澤聖老席聖武
天皇の御宸翰之御紙金泥の阿波院絶境縁天皇此
御宸筆法花一部一軸願戸皇子此筆之法花一部
一軸天神此御筆之小野道風筆也此大般若經
三百五十六卷其御親王之御筆の舍利講式一卷佐
理の待歌与殿此竹生爲源多經の扁此絵小枝笛平
敦盛不持也 靜の鼓秀卿。太刀吉次乃玄上其色
撥おは平經政其傍一ヶ捨してひりて白蛇現る云
其梅さるゝ元亨初書及縁記を梅さるゝ松室の仲美
の書子他術を将一日仲美よりくく日毎年三月十八日

竹生爲く神化の云有城之形師の書色をかくたまふに
幸甚あらんと仲美書其色を無へたして後仲美船より
かゝる所の遊一夜波起風烈三月十八日竹生爲く此の色
中く注款の書あり一葉舟より上り隨先船をさる世了
下の書色形く仲美歎甚してやま後竹生爲社内より
奉納其然して後之高倉院の御宇但る寺平經政
彼書色を乞はく竹生爲く彈に名物也現其其書色
捨たりといふ

輿地志畧卷之八十七終

